



部屋の中が、淡いオレンジ色に包まれてきたので、夕方だとわかった。

夕暮れの一瞬の光線は、朝日よりも眩しい。そしてその光は温かい。光を通すレースカーテンを捲り、外を眺めると思わず歌いだしたくなるような見事な夕焼けだった。

小さく鼻歌を歌い、夕焼けの色が変わるのを見続けた。

「カラスと一緒に、もう帰っちゃうの？」

いつの間にか起き出した彼が、背中から抱きつきながら耳元で囁いた。

「どうしよう……」

そう呟きながら、彼の手を強く払った。「まだ怒ってるの？」

その問いに答えずに、わたしはただ、窓の外の景色を見つめた。

今でも、わたしは信じられない。

彼が、あの子の元に走っていったことが、信じられない。

あれは、本当に今朝の出来事だったのだろうか。

うんと遠い昔のようにも感じるし、もしかしたら、これから起こる出来事の予知夢だったのではないかとすら、感じる。

要するに、いまのわたしは混乱しているのだった。

冷静な振りをして、彼に抱かされただけで疲労困憊なのだ。

彼とベッドの中に入る関係になることは、薄々感じていた。

出合った時に、わたしは彼に密やかにヒトメボレをしていたし、彼は彼で、わたしに興味を抱いているのを感じていた。

いずれそういう関係になる相手だと思っても、あれこれ聞けないものだ。

例えば「恋人は？」「好きな人はいるの？」「生年月日は？」「血液型は？」「学歴は家族構成は将来の夢は……」どれもこれも、意味がないことだ。

わたしが彼と恋に落ちるのに、必要な情報なんて、どこにもないではないか。

いま目の前にいる相手を愛おしく思うか思わないか、それだけが大切なのだ。

「恋人はいるの？」

このひと言を聞かなかったわたしも、自ら言わなかつた彼にも責任はない。

あの子が、合鍵を使ってこの部屋に入り、わたしの顔を見つめてからきびすをかえしたのも、問題はない。

問題なのは、彼が、あの子を追ったことだ。

そして、もっと問題なのは、鍵を取り返して戻ってきたことだ。わたしを、この部屋にひとり残して、三十分戻らなかつたことが、わたしは信じられないのだ。

「とっくに別れた子だったんだけど」と言った言葉に嘘はないことがわかったが、別れたと思っているのが彼のほうだけだったという現実が痛い。

一瞬オレンジだった日の光が赤く燃えて、冷たい影が伸びてきた。

ベランダに干してある洗濯物を取り込まないと、冷たくなってしまう。

わたしは、毛布を身体に巻いて、窓を開けてベランダへ滑りてた。

「掃除してないからベランダの床、汚いよ」

「汚れたら、足、ちゃんと洗うもん」

彼は小さく笑って、袖に腕を通していた。

「どこかにいくの？」

「お腹すいたから。すぐ戻るよ。お酒も買ってくるよ。待っててよ、すぐだから」

わたしは、自分のお腹が空いている事に気付いて、小さく頷いた。

「洗濯物、畳まないけど、部屋に入れておきますから。やさしいわたくし」

そういうと「畳んでくれてもいいけど。まあいいや。適当にカーテンレールにでも掛けといて」と言い残してドアの向こうに消えた。

ベランダから通りを見下ろすと、彼がこちらを見上げて手を振っていた。

バカみたい。

そう思いつつも、小さく手を振り返した。

「シャワー、借りてもいいですかあ」

少し大きな声を出してみた。

彼は、慌てて周囲をキョロキョロと見回してから「あとで返してくれるならいいよー」と叫んだ。

「返せないよ、バカ」と呟いてから、わたしは洗濯物の中に干してあったタオルを持って、浴室へ向かった。

タオルは少しだけお日様の匂いがした。

足の裏が、砂でざらざらしている。少しホッとした。

一人暮らしの男性で、マメにベランダ掃除までしている人なんて、なんだか信用できないではないか。

そう思ってから、女性をひとり残して他の女性を追う男は信用できるのか、という自問に失笑した。

熱めのシャワーを浴びながら、今日はシャワーを浴びるのが二回目だと思い出した。

朝からのことを振り返る。

出合った瞬間の予感どおり、わたしは彼の住む町に遊びに来た。

こうなることは、わかっていた。

だから、念入りに身体を洗って、いつもより少し緊張して、電車で揺られた。

好きな人に抱いてもらうために、わたしはいま、電車で揺られています。

なんて、滑稽で、なんて、幼いのか。

無責任かつ無邪気な感覚に酔いながら、わたしは車窓の流れる風景を楽しんだ。

わたしの家から彼の住む町まで、電車で片道七十九分、片道七百十円の旅。

駅の改札をでると、彼は落ち着かない様子で、旅行代理店のパンフレットに目を落としたり、壁に掛けられた時計を見たりしていた。それが愛おしく感じて、改札を通るのをやめた。

わざと姿が見えないように壁に隠れて、メールを打った。

「すみません。一本乗り遅れちゃった。でも、7分後に到着予定です。待っていてください」
着信音にすぐ反応した彼は、頭を掻きながら改札に目をやり、小さく溜息をついてから「わかりました。僕も実はいま、駅に向かってるところです」と嘘を書いて送ってきた。

わたしは、もう、居るくせにと、小さく笑ってから「では、お互いに遅刻ですね。おあいこです」とメールを返した。

そして、再びパンフレットに目を落とした彼の際を見て改札をこっそりと通り、背後から声を掛けた。

あのときの驚いた顔と、恥ずかしそうな表情が、とてもいいと思った。

「ずいぶん熱心にパンフレットを読んでいること」それだけ言うと、彼は観念した顔をして「旅行が好きなんですよ。一緒にいかが？」と京都旅行のパンフレットでわたしの頭を軽く叩いた。

「男はね、何でも隠れて予習する生き物なのですよ。例えばあなたが突然京都行きたい！と言ったときに『よく知らないけど』なんてとぼけながらね、案内をできるようにさ」

そういいながら、彼の家への道をゆっくりと歩き出した。

わたしは少し後を追いつながら「なるほど」と答えた。

彼は駅ビルの端に入っているコーヒーショップでテイクアウトのコーヒーを二つ買って、ずんずんと歩き出した。

少し遠回りだけど、公園があるので寄りませんか？

わたしは、黙って頷いて、やっぱり少し後ろを追いつ続けた。

ベンチに座ってすぐに、わたしと彼は唇を重ねた。コーヒーの香りに眩暈がした。大きな唇だと頼もしく感じた。

それから、わたしはこっそりと駅での様子を見ていたことを白状した。

彼は笑いながら「本当は二十分くらい前から待ってたんです。だって、家に居ても落ち着かなくて」と答えてから、わたしの頭を撫でた。

平日の昼間の公園には誰もいない。ただ、ベンチが冷たくて、遊具が壊れたように止まっていて、木の葉だけが、舞い降りてきた。

ここで動いているのは、息をしているのはわたしと、彼と、植物だけだ。そんな空間にいることに溜息が漏れた。

恋に落ちるのはたやすい。

些細な偶然や、小さな出来事の全てを必然に感じて、人を愚かにする。

冷めるのも、早い。

人はすぐに小利口になってしまうようにできているから。

でも、彼となら、もう少し愚かで居られそうな予感がした。体の相性もよかった。お互いに、淡泊なのだ。

熱い体は好きじゃない。

できれば、体温の低いままで、眠るように抱き合いたい。そんな希望にこたえてくれる男性だと知った。

服を着て、すっかり暗くなった部屋に戻った。

一人で、また待っている。初めて訪れた部屋で二回も一人ぼっちにされるなんて、心細い。しばらくベッドの上で体育座りをして、あの子のことを思い出した。髪はわたしよりも長くて、きれいな茶色だった。

白いマフラーを巻いていた。それから大きな目をしていた。もしかしたら、ビックリして目を見開いていただけかもしれないけれど。

玄関の鍵が開けられる音がして、ビニール袋の擦れる音と同時に彼が入ってきた。

「何が好きか、わからないから。コンビニ三軒回っちゃったよ」そう言って、お酒を一つ一つテーブルに並べた。

「どれでも、好きなものをどうぞ。酔って泊まってってよ」と笑いながら、手品のように次々と缶を取り出した。

「こんなに飲めないでしょう？」呆れた声を出すと彼は「腐らないからいいよ。それからこれ」とわたしの頬に、ゲーにした手を当ててきた。

チクッと鋭い痛みが走った。体ごと仰け反って、彼をにらみつけた。彼は、笑いながら謝り、手の中にあった物をわたしに手渡した。切符の角が、頬に触れていたのだった。

「回数券です」

手のひらに載せられたキップを暫く眺めた。

「10枚分のお値段で11枚の切符が買えます」

黙ったまま、キップを眺めた。

「最後は片道切符になります」

今度は彼の顔を見つめた。

「だから、六回目、僕の家に来るときには、ずっとそばに居たらいいじゃないって意味です」

と目を逸らして大きな声を出した。

「恥ずかしいから、言わなかったですが、僕はあなたが好きですよ」

そう続けて、お酒の缶のプルトップを開けた。

わたしも釣られて、普段飲むことのないハイボールの缶に手を伸ばして、開けた。

どちらからともなく、乾杯をして、黙って暫くお酒を飲んだ。

ふと窓の外に目をやると、いつの間にか月が顔を出していた。

「とてもいいムード的な場面ですが、今日わたしが帰宅するのにこの回数券を使うと、最後の11枚目は帰宅キップになるのですが……」

そういうと、彼は「あー……え？　じゃあ今回は使うの禁止です」と慌ててから「今日、帰宅するのも禁止です」と少し怒った声を出した。

わたしは、あの子の茶色い髪と白いマフラーを思い出しながらも、もう少し愚かでいようと決意した。